

【臨床・研究】

食道癌患者の自覚症状に関する観察研究

さ 査 な いし むら のり ひさ
 娜 石 村 典 久
きの した よし かず
木 下 芳 一

キーワード：食道癌，表在癌，進行癌，自覚症状，嚥下困難

要 旨

食道癌は進行すると食道内腔が狭小化し嚥下障害を生じるが，病変の進行度や性状と自覚症状との関連についての詳細な評価は行われていない。今回，2016年1月から2017年1月の間に当院で診療を受けた61名の食道癌患者について自覚症状に関する調査を行った。61名中36名（59％）に自覚症状を認め，嚥下障害が最も頻度の高い症状であった。嚥下障害は表在食道癌では18％に認められたが，その大半は長径が2 cm以上であった。一方，進行癌では93％に嚥下障害を認めた。また，表在癌よりも進行癌が，非全周性病変よりも全周性病変が，病変の長径が短い例よりも長い例の方が嚥下障害を有する頻度が高く，程度も強いことが示された。今回の結果から低侵襲治療が可能な粘膜内に限局した食道癌を効果的に発見するためには自覚症状を重視したスクリーニングでは感度が十分でなく，発症高リスク群を設定した内視鏡スクリーニングが必要であると考えられた。

はじめに

食道には逆流性食道炎，好酸球性食道炎，アカラシアをはじめとして様々な疾患が発症する。これらの疾患はそれぞれ特徴的な症状を有する。逆流性食道炎では胸焼けや呑酸が典型的な症状である。好酸球性食道炎では小児期には腹痛，成人以降になると，つかえ感や嚥下障害が主症状となることが多い¹⁾。また，アカラシアも嚥下障害を有

するが，症状が進行性ではなく日によって変化し症状がない日も存在することが特徴の一つとされている。さらに温かい食事は通過しやすいが冷たい飲み物が通過しにくいことも知られている²⁾。

食道癌は食道中部～下部に好発する悪性腫瘍で進行すると食道の通過障害を生じる。このため，早期の段階では嚥下障害などの食道に起因する自覚症状は軽度であり，進行癌となり食道内腔の狭窄をきたすと強い嚥下障害を生じるようになると考えられているが，病変の進行度や性状と自覚症状との関連についての詳細な評価は行われていない。

Norihisa ISHIMURA et al.

島根大学医学部内科学講座第二

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部内科学講座第二